

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32421

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770083

研究課題名(和文)戦時体制下における雑誌メディアの書誌的研究

研究課題名(英文)Bibliographic study of magazine media under the wartime regime

研究代表者

掛野 剛史(kakeno, takeshi)

埼玉学園大学・人間学部・准教授

研究者番号：00453465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、これまでほとんど注目されていなかったものの、戦時下において一定の役割を果たした、日本報道社と山海堂について、その刊行した雑誌を中心に調査を進め、日本報道社が刊行した雑誌『征旗』、山海堂が刊行した雑誌『報道』について、収集を行うとともに、その詳細な書誌を作成して考察分析を行った。戦時体制下における出版社やジャーナリストの動向とともに、そのメディア編成について、より多角的な考察を行うための足がかりとなり、戦争プロパガンダとされる雑誌メディアの実態を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, although it was hardly noticed in the past, we conducted a survey mainly on journals published by Nippon Hondousya and Sankaido, which played a certain role in the wartime period, and was published by a Japanese media company We gathered about the magazine "Seiki (Conquest)" and the magazine published by Sankaido "Houdou (news report)", and made a detailed bibliography for consideration analysis. Along with the trends of publishers and journalists under the wartime regime, it became a foothold for doing a more diversified discussion about the media organization, and it was possible to clarify the actual state of magazine media which is regarded as war propaganda.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 メディア 雑誌 戦時下 書誌

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である掛野剛史(以下単に私とする)は平成23年度から平成24年度において、若手研究(B)「文壇と出版メディアによる戦時体制の編成と展開に関する研究」の課題に取り組んだ。これまで総覧できなかった文藝春秋社発行の時局雑誌『現地報告』の総目次を作成し、その意義や問題点などを明らかにした。また、戦地で発行されていた雑誌『兵隊』の中で文章を発表する一般兵隊の姿を分析し、それら兵隊とその創作活動と、火野葦平の「麦と兵隊」を始めとする創作活動の相関関係を明らかにするなどの成果を挙げた。

ただ、残念ながら文壇と出版メディア相互による「編成と展開」といった相互交渉については研究の手を広げることができなかった。その理由の最たるものは、対象となる出版メディア資料整備がほとんどなされておらず、資料の収集と整備からはじめる必要があったからだとして分析している。雑誌『兵隊』など復刻版が出ているものは限定的であり、多くは公共機関における所蔵にも欠号があり、そもそも所蔵していない雑誌も多かった。また研究期間も2年間だったため、書誌的調査を行うには時間的に難しかった。

折しも現在、出版メディア史研究の分野においては、これまでの「メディア弾圧史」といった観点から「メディア統制史」といった観点からの研究が進んでおり、抵抗・弾圧といった枠組みの相対化が図られている。特に新聞の統制については近年研究が進んでおり、吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム 1940年代メディア史』(昭和堂、2010年)、里見脩『新聞統合 戦時期におけるメディアと国家』(勁草書房、2011年)などの成果がある。

だが、雑誌などの出版については、先の二著が依拠した『情報局関係資料』(柏書房、2000年)で残されているものが新聞関係のものに限られていることもあり、こうしたまとまった成果は未だ現われていない。佐藤卓己『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』(中公新書、2004年)といった新たな研究もあるものの、その中で大きく取り上げられる雑誌『新若人』は、通覧することが容易ではなく、私の調査では全57冊刊行の内、国会図書館に所蔵のあるものはわずかに21冊に過ぎず、その他の4つの公共機関をあわせても5冊は見るのことができない号がある。雑誌に関しては何よりもまず資料の整備が急がれるというのが現状なのである。著名な『文藝春秋』

の海外版としてごく一時期発行されていた『Japan To-day』なども、近年『Japan To-day』研究—戦時期『文藝春秋』の海外発信』(作品社、2011年3月)が出るまで総覧することは難しかった。その他の雑誌においても事は同様であり、この時期の雑誌メディアの動向を総体的に捉えるためには、地道ではあるがこうした個別具体的な成果を一つ一つ積み重ねることが必要である。私は『出版研究』に発表した「00年代の近代出版史研究」(2013)というレビュー論文の中で、最近の出版史研究の動向と今後の課題について、既存の資料をいかに整備して広く利用できる形にするかが今後一層重要になってくると述べたことがある。本研究が試みるのも、具体的で個別的な戦時体制下の雑誌の書誌的な調査と研究を網羅的に行うことであるが、その先には、それを積み重ねることで開けてくるこの時期の出版メディアの全体的な考察を見据えている。それは前回の若手研究(B)での課題を踏まえ、そこでの知見をさらに発展させるために必要な基盤作りといっても良い内容である。

2. 研究の目的

本研究は、総力戦体制下における日本の雑誌、特に政治時事を扱う総合雑誌、時局雑誌の実態について書誌的研究を行うものである。

総力戦体制下におけるメディア編成については、資料的な整備も進んだこともあり、メディア史研究の分野において近年特に考察が深化している。ただ、資料的な制約もいまだ大きく、網羅的なものまでには至っていない。また私が専門とする文学研究の分野において、必ずしもそれらの成果が活かされているわけではない。メディアの全体状況を捉えるために、またそれを文学研究の問題として、今後さらに発展的な考察を行うために、本研究ではメディアが置かれた全体状況をおさえつつ、雑誌メディアのより一層の網羅的な資料整備や書誌調査を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は以下のように行った。

戦時下の雑誌、特に時局と強い関わりを持つ総合雑誌、時局雑誌について、メディア統制の全体像の中でその動向を把握する。

戦時下の雑誌、特に総合雑誌、時局雑誌の所蔵状況を調査し、それらを可能な限り広く収集（複写含む）する。

で入手した資料を整理分析しながら、目次、執筆者目録などのデータベースを作成し、個別の雑誌についてその全体を把握できる見取り図を作成する。

上記の成果に基づき、総力体制下におけるメディア統制の全体像の中で、個別の雑誌メディアと出版社の存在を位置づけるとともに、そこに関わる文学の問題を明らかにしていく。

4. 研究成果

研究初年度においては、戦時下の出版団体、日本出版文化協会（のちの日本出版会）の機関紙『出版文化』の復刻版を入手し、戦時下の『出版年鑑』と『雑誌年鑑』（1939年～1942年版）および『日本読書新聞』や新聞記事などの関連資料と併せて、戦時下の出版社の動向や出版政策などの全体像についての理解を深めた。

具体的な雑誌分析については、陸軍と講談社の協力関係の下、1944年に設立された日本報道社（戦後は光文社へと変更）に注目し、同社が1944年9月から1945年3月号まで発行した雑誌『征旗』全号について、現物による書誌的分析を行い、誌面本文を元にした総目次を作成した。この総目次には関連事項の調査に基づいた詳細な注を付し、時代背景や人物情報などを補うことで、読める書誌としての意味を持たせることができた。また誌面の内容分析を行い、その誌面に影響する陸軍報道部、大日本言論報国会、大東研究所といった各種の力関係を考察し、この時代における雑誌の意味の考察やその位置づけを行った。

日本報道社については、同社が刊行した書籍、また前身となった出版社についても情報、資料収集を行い、講談社を中心とした総力戦体制下におけるメディア編成について、より多角的な考察を行うための足がかりを得ることができた。

二年目は前年度に引き続き、戦時下において陸軍報道部と密接にかかわった雑誌、出版社、言論人に焦点を当て、その影響関係を含めた実態解明と雑誌メディア自体の展開を

調査、考察した。

具体的には戦後に「戦犯出版社」として名指された出版社の一つ、山海堂の活動に焦点を当てた。戦時下の『内燃機関』『機械化』という雑誌の展開を跡づけ、軍関係者との関わりを強めていくことを示し、この流れの中に『報道』というプロパガンダ誌があることを証した。山海堂が発行したこの『報道』という雑誌を編集していた大東研究所、その代表である大熊武雄についてはこれまで全く注目されたことはなく、参照できる文献もなかったが、この団体と人物は戦時のメディア統制に関与し、また著名な鈴木庫三とも強い結びつきを持つ重要な団体であり人物であった。特に大熊武雄についてはその履歴を跡づけ、著作一覧を作成公開することで今後の研究の基礎的資料となり得た。

雑誌『報道』は創刊号の奥付によれば5万部発行されたことになっているにもかかわらず、その全容は不明なことが多い。全冊を所蔵している公共機関が存在せず、国会図書館でも13冊しか所蔵しておらず、各地の公共機関においても所蔵は極めて稀であり、終刊の時期も不明である。本年度に収集したもののおよび以前より収集していた『報道』と、公共機関に散在するものをあわせて、本研究では1～38号までのうち25号を除く37冊を実見することができた（これはその後すべてを実見確認することができた）。

『報道』の書誌を明らかにし、叢書形式が雑誌形式に変わり、月刊から月二回刊へと変わっていくことを確認した。また大熊武雄が一貫して編集にかかわったこと、文学関係の記事は多くないが、火野葦平など報道班員の寄稿もあったことを明らかにした。また誌面内容の検討により、『報道』が現実の戦況と戦局の全体像を見えなくする戦争プロパガンダとして効果を発揮していたことなども明らかにした。

三年目と最終年度においては、戦時下の雑誌メディアの諸相を考察するため、多角的な資料調査、考察を行った。

特に文芸春秋社発行の『大洋』『航空文化』といった雑誌について、資料の入手とその実態調査を進め、書誌の調査、目次情報の調査、誌面内容の調査や関連雑誌との関係性について調査を行ったほか、入手した村雨退二郎関係資料によって戦時下の大衆文学の動向の調査考察を行い、村雨退二郎が執筆していた雑誌（講談社発行『講談倶楽部』、桜華社発行『懸賞界（のち改題して『文芸情報』）』など）、単行本など関連資料についても収集を行った。単行本の調査においてはいわゆる有名出版社ではない多くの群小出版社の存在について改めて意識することとなった。

こうした過程で、関連的な成果として火野葦平の研究動向についてまとめる機会を得たが、まとめる際に多くの同時代文献に目を通すことになり、同時代のメディア展開につ

いてもあわせて知見を深めることができた。さらに、菊池寛とのかかわりから『婦女界』という女性雑誌について文章をまとめる機会を得て、二者の関係を通時的に見ていくことができたが、その過程で戦時下の女性雑誌の展開についても考察することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

掛野剛史、菊池寛と『婦女界』、日本古書通信、査読無、2017

掛野剛史、研究動向 火野葦平、昭和文学研究、査読有、

掛野剛史、戦時下出版メディアの諸相 (二) 山海堂と雑誌『報道』、大東研究所、埼玉学園大学人間学部編、査読無、

掛野剛史、戦時下出版メディアの諸相 (一) 日本報道社と雑誌『征旗』、論樹、

査読無、2014

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

書評

6. 研究組織

(1)研究代表者

掛野 剛史 (Kakeno, Takeshi)

埼玉学園大学・人間学部・准教授

研究者番号：00453465

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()